〈第一回本校入試〉

令和五年度 入学試験問題

国　語

合図があるまで、問題用紙を開かずに左の注意をよく読みましょう。

〔注　意〕

一. この試験問題の解答時間は五十分です。
二. 答えは、すべて解答用紙に書きなさい。
三. 始める前に、解答用紙の決められた場所に受験番号・氏名を書きなさい。
四. この問題は十四ページあります。ページの不足や乱れがあったら、声を出さずに手をあげなさい。
五. 印刷のはっきりしない所があったら、声を出さずに手をあげなさい。
六. 問題を読むのに声を出したり、音をたてたりしてはいけません。
七. 問題文や問いの中にある言葉の意味についての質問にはお答えしません。
八. 字数を数える場合は、句読点や記号も一字として数えなさい。

佐久長聖中学校

問題一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の――部㋐～㋕のカタカナを漢字に直しなさい。

㋐ハンシャ的にボールをよけた。　詩を㋑ロウドクする。　㋒タイケイ的に研究する。

㋓カチ観が多様化している。　事業をさらに㋔カクダイする。　㋕シュウニュウと支出の関係。

問二 次の――部**ア**～**エ**の中から、品詞が他と**異なる**ものを一つ選び、その記号を書きなさい。

ア わずかに残っている細い通り道。
イ 土の道が好きだ。
ウ 腕を広げた大きな木の葉の繁み。
エ 道はかすかに湿っている。

問三 次の――部「難しい」と品詞が同じものを、あとの――部**ア**～**エ**の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

せっかくのチャンスをうまく生かすことは難しい。

ア すぐれた文章は決して生まれない。
イ 比較にならない。
ウ 予期しない発見がある。
エ 他人は自分ではない。

問四 次の(1)(2)の□に漢字一字を補うと、四つの熟語が完成します。あてはまる漢字をあとの［語群］**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。

(1)　運→□→進　移→□→列

(2)　決→□→外　失→□→思

［語群］　**ア** 休　**イ** 意　**ウ** 行　**エ** 校

問題二　次の文章は、『手でかくとなぜいいか？　～40代からの絵手紙ライフ～』（結城俊也）の一節です。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

「精神的なものが頭と腕の中間あたりにいる気がしますね。」林真理子（作家）

ここでは当代の人気作家、林真理子氏が雑誌インタビューで語った言葉にスポットを当ててみたいと思います。「精神的なものが頭と腕の中間あたりにいる」とはおもしろい言い回しですが、①脳と身体の密接な関係性を考えるなら、言い得て妙な表現と言えるでしょう。

私たちは、手を自在に動かすことによって、滞りなく日常生活を送っています。例えば料理を作ったり、趣味の絵手紙を楽しんだりできるのも手が自由に動くからです。手を動かすには、脳から「手を動かせ！」という命令が出され、それが手の筋肉に伝わることで手は動きます。これだけをみると、あたかも脳が命令を出す主人であり、手は命令を忠実に実行する家来のようです。しかし、両者の関係は、脳から手への一方的な命令関係だけではありません。手も脳へ情報を送り、脳の命令の仕方に影響を与えています。

手がきを例に考えてみましょう。脳はペンを握って手を動かすように命令を出しますが、同時にペン先の情報も手から脳へ送られます。例えば「これは柔らかいペン先だな」と感じたら、その情報は手から感覚神経を介して脳に伝わります。そして、それ相応の力を入れて書こうとするでしょう。また、「このペン先は硬めだな」と感じたら、同じようにその情報は脳に伝わり、硬めのペン先に適した書き方をするはずです。このように脳は手からの情報をもとに、その都度命令の仕方を変えているのです。

脳から命令が出て手が動き、動かした手の情報が脳に送られる。そして、その情報をもとに修正された命令が脳から出され、手の動かし方を調整する……。②手がきという行為は、このようなやり取りを常に繰り返し、微妙な調整を行っています。だからこそ、私たちは刻々と変わる日常の中で、うまく生活して（動いて）いけるわけです。

文章を書くという行為は、書きたいことがすべて頭の中で出来あがっていて、それを手が機械的に書き記すといったものではありません。手を動かすことで脳が刺激され、それによって創造力が目覚め、そして手を動かしながら書くことによって、頭の中のモヤモヤが少しずつ文字になっていく。そういった行為が手がきなのです。

文学者としても名高い物理学者の寺田寅彦は、「書くことで頭が反応し、考えているだけではけして思い浮かばない潜在的な意識が呼びさまされる」と述べています。言い換えるなら、「書くことによって、書かなければ出てこなかった言葉が飛び

出してくる」ということになるでしょう。まさにここまで考察してきたことを端的に表現した言葉だと思います。どうやら高名な物理学者も、手を動かしながら書くことで、自分が考えていたこと以上のことが書けると思っていたようです。

以上のようなことを考え合わせれば、表題の「精神的なものが頭と腕の中間あたりにいる」という言葉も理解しやすいのではないでしょうか。「精神的なもの」という言い回しを「文章を生み出す創造力」と考えるなら、それは頭（脳）と腕（手）とのやり取りにおいて生まれてくるものです。つまり「頭と腕の中間あたりにいる」というのは、文章の創造力は、脳と手の協同作業により発露するということを意味していると考えられます。

最後に同じインタビューで林氏が述べている次の言葉を紹介したいと思います。

「書き始めると、手が勝手に動きだすんです。手がどんどん動いて、主人公が勝手にしゃべって、物語が進んでいくときがある。」

「③主人公が勝手にしゃべる」とはどういうことか。それは、手というアナログな身体の一部を介して書くことで脳が反応し、潜在的な意識が呼びさまされた結果として「しゃべり出した」のではないか。そんな気がしてなりません。手がきの奥深さが伝わってくる言葉だと思いませんか？

「ワープロの文字を打つことと、手で書くこと（書字）とは、決して同じではありません。」石川九楊（書家）

パソコンやスマホの利用者が圧倒的に増え、情報伝達のあり様が劇的な変貌を遂げています。そのような中、書家の石川九楊氏は、④パソコンやスマホ一辺倒に突き進んでいる現状に警鐘を鳴らしています。ここでは手で「書く」ことと、パソコンで「打つ」ことが、どのように違うのかについて考えてみたいと思います。

石川氏は「秋が来る」という一文を例にあげ、両者の違いを次のように説明しています。最初に手で「書く」場合を考えてみましょう。

「まず『秋が来る』と書くには、頭の中に秋のイメージが浮かぶことが必要です。それから手を使って『秋が来る』と書きつけます。その際、筆圧の感覚や書き出される文字の視覚情報は、常に脳内に入力されていきます。そして、それらの刺激に呼応するかのように、さまざまなシーンが浮かんでくるに違いありません。それは秋の長雨のイメージかもしれないし、晴れわたる青空のイメージかもしれません。「秋」という一字を手で書くことによって、私たちの想念は次の展開にまで広がっていくのです。」

一方、パソコンで「打つ」場合はどうでしょう。頭の中では秋のイメージが浮かんでいても、キーボードの場合、ローマ字

なら「akigakuru」と打ち込まなければなりません。これではイメージと実際の操作との間に無用な分裂が起こると言います。また、「⑤　・飽き・安芸」などの文字が出てくる場合があり、⑥意識の上で雑音が生じます。このような無用なストレスが蓄積すれば、文の出来映えに影響するとこの書家は言うのです。まことに正鵠を得た指摘ではないでしょうか。

パソコンはどちらかというと記号を処理することがメインです。文字の視覚情報を選択して打ち込みます。それに対して、手がきは脳の記憶中枢から漢字を引き出して書いています。このように「書く」ことと「打つ」ことは、決して同じではないのです。

さて、ここでもう一つ、石川氏の言葉を紹介しましょう。

「『書く』ことは、ペンや鉛筆を持つ手と紙という対象の間で繰り広げられる言葉の一大誕生劇なのです。」

「書く」ことが言葉の一大誕生劇であるとはどのようなことなのでしょうか。ここまで指摘してきたように、「書く」という行為は、頭の中で完成している文章を機械的に書き記すというものではありません。書くことで潜在意識が覚醒し、それが思いもよらぬ言葉となって飛び出してくる。「書く」とは、まさに書くことによってしか生まれない言葉の誕生ドラマなのです。

このように言葉の誕生が「書く」という行為に支えられているのなら、紡ぎ出される言葉は、何で書くのか、そして何に書くのかといったことに影響されるでしょう。毛筆で書くのか、それともボールペンか。便箋に書くのか、それとも葉書なのか。それによって書きぶりも違ってくるでしょう。そして書きぶりが違うということは、自分の奥底から出てくる言葉も違ってくることにつながります。筆記用具が変われば書きぶりも変わる。書きぶりが変われば言葉（思考）も変化する。このようなドラマチックな言葉の誕生劇こそが「書く」という行為である。これが書家の言いたかったことではないでしょうか。

作家の吉行淳之介は、長年「からだ」を表す字として「軀」を使ってきたと言います。「体」ではなんだかスカスカした感じで困るのだそうです。ですが「軀」という字を書くには、肉体的エネルギーがかなり必要なので、⑦そのうちいやになるのではないかと言っています。それは単にこの字の字画が多いからではありません。「軀」という字と自分の肉体との間に落差が出てくるからだと述べています。

自分の身体状態の変化に伴って、使う字が変わってくる可能性について触れた興味深い見解です。年を重ねた身体は、はたしてどのような字を選び出すのか。それを知っているのは、ペンを持って紙に向き合う手だけでしょう。これも書くことにまつわる一つのドラマなのです。

ここまで「書く」と「打つ」が異なる営みであること、そして⑧「書く」という行為がいかにドラマチックであるかについてみてきました。先に述べたように、現代は「打つ」派が圧倒的多数を占めています。だからこそ、「書く」と「打つ」を上手に使い分けていく必要があるのではないでしょうか。

問一　本文3行目「①脳と身体の密接な関係性」とありますが、その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　身体を動かすことで得られる情報を脳に伝達したあとで脳が身体へ新たな動きをうながしている。
イ　常に脳から身体への命令を伝達することで日常生活を問題なく送ることができるようになっている。
ウ　身体から伝わってきた感覚が情報として脳に伝達するので身体の方が動かし方の全てを決めている。
エ　身体への命令は微妙な調整を脳内で行ってから伝達されるので変化する日常に対応することができる。

問二　本文16行目「②手がきという行為」とありますが、どのような行為のことですか。三十字以内で説明しなさい。

問三　本文32行目「③主人公が勝手にしゃべる」とありますが、この「主人公」とは何のことを表していますか。本文中より十字でぬき出し、そのまま書きなさい。

問四　本文37行目「④パソコンやスマホ一辺倒に突き進んでいる現状に警鐘を鳴らしています」とありますが、どういうことですか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　パソコンやスマホを利用する人が増えてしまい情報伝達が多様化している問題を訴(うった)えている。
イ　手書きよりもパソコンやスマホで文字を入力する機会が多くなっていることを問題視している。
ウ　手で書くことと文字を打つことは同じであると勘違(かんちが)いしている人が多いことに驚(おどろ)いている。
エ　若者世代を中心にスマホを利用する人が増えていることを手書き世代の人たちが嘆(なげ)いている。

問五　本文48行目「⑤」にあてはまる語を、漢字を用いて自分で考えて書きなさい。

問六　本文48行目「⑥意識の上で雑音が生じます」とありますが、どういうことですか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　打ち込んだ文字の視覚情報と頭の中のイメージが一致するまで複数の情報を取捨選択するということ。
イ　頭の中のイメージが入力する時の刺激に呼応して複数に分裂するため無駄な情報が多くなるということ。
ウ　イメージを意識していてもローマ字入力する時に記号化されてしまい別のイメージに変わるということ。
エ　入力された文字を変換していく過程で多くの誤変換があるためイメージが保てなくなるということ。

問七　本文64行目「⑦そのうちいやになる」とありますが、なぜですか。そのように述べる理由を本文中から二十字でぬき出し、そのまま書きなさい。

問八　本文70行目「⑧『書く』という行為がいかにドラマチックであるか」とありますが、どういうことですか。書き始めを「書くことで～」にして、五十字以内で説明しなさい。

問九　本文を読んだ6人の生徒が会話をしています。6人のうち本文の内容と**あてはまらない人をすべて選び**、その記号を書きなさい。

ア　林さんも石川さんも手書きの方が自分に良い刺激を与えてくれると言っているから作者は手書きをすすめているんだね。
イ　そうだね。手書きをしていれば考えがまとまったり新しい言葉が生まれてくる可能性があるから書いた方が良いんだね。
ウ　新しい言葉というよりは元々潜在意識の中にあって今まで忘れてしまった言葉を書くことで思い出せるからすごいよね。
エ　それだけじゃなくて身体も鍛えられて効率の良い動かし方を覚えて疲れにくくなるからたくさん書く方が良いと思うよ。
オ　たくさん書いていれば身体状態も変わってさらに筆記用具も変わっていけば考え方も変化していく良い機会になるよね。
カ　だからこそ手で書くことで生まれる言葉があるのを理解して「打つ」機会の多い現状を見直す必要があると思うよ。

問題三　次の文章は、『天国からの宅配便』（柊サナカ）の一節です。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

「今日、住井さんが家にお帰りになったら、このゲーム機には、あらかじめＩＤとパスワードがセットされておりますので、このヘッドセットをつけて、ゲーム機を起動してください。そうすれば、すべてが明らかになるそうです。遺品自体の受け渡しも、ゲーム内で行われます」

ゲーム内で、①遺品を受け渡す？　いったい何が、どうなっているのか。

「え。では、このゲーム機はどうすれば。見るからに新品みたいですよね」

「このためにご依頼人が準備したものですから、ご自由にお使いください。ポケットＷｉ-Ｆｉだけはレンタルなので、使い終わったらご返送を。返送用の伝票はここにあります。費用はかかりませんので、ご安心ください」と、説明される。

何が何だかわからない。

祖母は電化製品全般を毛嫌いしており、洗濯機を使う母に、ずっと嫌みを言っていた。電気炊飯釜の導入さえ、メシが不味くなるからと許さなかった。いまだに我が家の掃除は、箒とちり取りと雑巾だ。特に祖母はゲーム機が嫌いで、どんなに文香が欲しがろうとも、家では禁止だった。

「わたし、ゲームって、やったことないんです」

「操作は、そう難しいものではないので大丈夫です」

もしわからないことや、困ったことがあればこちらにと、天国宅配便の連絡先をもらった。七星はヘルメットをかぶり、

「それでは、失礼します！」とエンジン音を響かせながら去って行ってしまった。

今の、何だったのだろう。

手元の謎のゲーム機、見知らぬ男、祖母からの遺品。

夢の中で、脈絡もなく展開するストーリーみたいに、すべてが繋がっていないように思える。

この糸谷とは誰なのか。祖母がこんなサービスまで使って、ゲーム内で孫の自分に送りたいものとは、何なのか。

とりあえず、すべては帰って、ゲームを起動してからだと、文香は力を込めて自転車をこぎ始める。

家に帰ると、自分の部屋にこもった。

どんな話が出てきても、驚かずにいようと、気持ちの整理をしようとするが、うまくいかない。祖母と同い年くらいのおじいさんにしては、選んだのがこのゲーム機というのが、いまひとつわからない。戦後の苦しい時期を、ともに過ごした祖母の

かつての恋人が、運命に引き裂かれて地方と東京に。そしていきなりゲームを？　孫に？　送りつけてくる？

まあ、いくら想像していてもわからないので、文香は「よしっ」と気合いを入れつつ、ポケットＷｉ－Ｆｉと、そのゲーム機とやらを起動してみる。入っているゲームは、なんてことはない。文香もよく知っている、オセロのようだった。

ヘッドセットを差し込むと、ヘッドフォンから軽快な音が流れ出した。自分が考えているよりももっと、音質が良くて驚く。

なんだこれは、このオセロをどうすればいいんだ。とりあえず始まりそうなボタンを押してみた。緑地に碁盤の目、白と黒の石の、おなじみの盤面が広がる。

隅っこのところに、〈ｋｅｎ１〉とあるが、これが名前なのだろうか。自己紹介欄のようなところには、〈オセロ大好きｋｅｎ１です！　よろしく〉とある。

音楽が急に速いものに変わった。対戦モードのようだ。

すると。

「八重っち？　八重っちじゃないよね？　まさかねー、じゃあ孫の文香さん？　あってる？」

陽気な声がした。八重は祖母の名だ。でも、〝八重っち〟？　祖母と繋がりがあるので、てっきり祖母と同じ歳くらいのおじいさんを想像していたが、この声、ひどく若い。そして軽い。

そうか、糸谷健一郎で、ｋｅｎ１なのか、と今わかった。

何か答えなきゃ、と思って、文香は焦る。

「もしもし？　ええと、これ、声、繋がってるんですよね。聞こえてますか。もしもし？　住井文香です。住井八重の孫です、よ、よろしくお願いします」

「聞こえてるよー、じゃ、お孫さんのよしみで、白でお願いしゃーす。俺は黒ね。後攻が有利だから、とりあえず俺から行きます、よっ、と」と言いつつ、ｋｅｎ１は黒を置いた。なぜかオンラインで、いきなりオセロの対戦が始まっている。

何なんだろう、と思いつつ、とりあえず、文香も白を打った。一個だけ、黒をひっくり返してみる。

「あの、あのすみません。ｋｅｎ１さん？　祖母とはどういう……」

「八重っちは、俺のオセロ仲間でさー、毎日つるんで、すげえ楽しかったんだー」と言う。

話を総合するに、どうやら祖母はボケ防止にと、誰かから与えられたらしきオンラインのオセロゲームで、この軽そうな男、ｋｅｎ１と毎日のようにやりとりをしていたらしい。病室にはそんなものの影も形も無かったので、誰かが見舞いに来たときには、隠していたのかもしれない。

それにしても、このｋｅｎ１、しゃべり方がテレビの番組で見たホスト、もしくはギャル男そのもので、文香は、東京はい

ろいろすごいな……首都だな……と遠い目になる。こんな風に、いろいろぺらぺら立て続けにしゃべられたら、うまく会話できるか自信がない。よく祖母はこの男とやりとりできたものだ。ｋｅｎ１の姿をイメージしてみるが、どうやら声の調子から、寝ころんだままゲームをしているらしい。飲み屋とかで遅くまで飲み歩いて、昼頃起き出して寝床でそのままゲーム、無職でぶらぶら親のすねをかじっているような姿が思い浮かぶ。

見れば、右隅にはｋｅｎ１、左隅には八重とある。本当に、祖母はまめにこのオセロをプレイしていたらしい。②何の印なのか、大きさの違う星印もいくつか見える。

「八重っち、うちには孫がひとりいて、っていう話をよくしててさ。その孫ってのが俺と歳も近いから、盛り上がっちゃって。孫は東京に出たいって言うけど、そんなの絶対許さないんだって話をしててー」

何が〝絶対許さないんだ〟だ。

祖母の八重は、見知らぬ他人にもそんな話をしていたのかと、③文香は怒りに震える。勝手に雑談のネタにされていたことも許せないが、文香にとっては人生の一大事でも、祖母にとっては、見も知らぬ人と、ゲームの合間に簡単に話せる程度の、そんなに軽い話題だったのかと。

オセロの白が、一気に黒に返される。ｋｅｎ１、なかなか強い。

「でね、俺、言ったんだ。女に学がいらないなんて、もう古い古いって。八重っち大正生まれなの？　って訊いたら、まだそんな歳じゃないって怒る怒る」

このギャル男、声だけだからって、④怖いものなしだな……文香は思った。

「だってさ、生きていく力は、男だろうが女だろうが、絶対要るだろって、オセロしながら毎日大激論よ。したらさ、八重っちが、東京なんて出て行ったら、帰ってこなくなって家も継がない、ひとり娘なのに、そんなことが許されていいはずがない、とか言い出すからさ。俺、なんだあ、八重っちの家って、そんなに名家で、重要文化財とかに住んでんの？　家、石油出るとか？　って訊いたら、ただの田舎の家だって。俺、悪いんだけど、すげえ笑って、継ぐ……家も……普通の……家なのに……〝継がせる〟とか……って言って、ヒイヒイ笑ったら、カンカンになって怒るのな」

そのときの祖母の顔を見てやりたかった。そうなのだ、特に我が家は名家というわけではない。伝えられた財宝もなければ、殿様の血を引く家系とかでもない。ごく普通の家だ。

また黒がひとつ置かれて、オセロは進む。

「で、八重っち自身は、家継いで人生満足してたの？　って訊いたんだ。八重っちが、そりゃそうだって、⑤声が小さくなるからさ、ええー、声小さくない？　って突っ込んだら、みんながそうだったんだからそうなんだ、って声を張るんだよね。で

も、みんなと同じだからそれでいいんだって、なんかちょっとなー、って言ったら、黙っちゃって。八重っちは、やりたいこととか、本当はなかったの？　って訊いたの。そしたらさ」

オセロは劣勢だった。頭の中が、よくまとまらない。

「――映画も好きなときに見たかった、もっと旅行もしたかったって、八重っち、やりたいこと、ボロボロ出てくんだよ」

オセロの指が止まる。

旅行なんてくだらね。映画なんてくだらね、と吐き捨てるように言っていた祖母の声が不意に蘇る。

「じゃあさあ、お孫さんもそうじゃない？　って、俺言った」

文香はそのまま、ゲーム画面を前に、動けずにいた。

「俺さー、俺だってこんなに身体が悪くなかったら、映画も好きなときに見たかったし、旅行もしたかったよ。八重っち、俺とお揃いじゃん、って言ったら、八重っちオセロしながら、声出して泣いてんのよ。でもオセロは強いんだ、八重っち」

ｋｅｎ１は笑っている。

「俺、ひとり暮らしもしてみたかったし、大学も行きたかった。車でドライブとかもしてみたかった。この身体だから、俺にはもう無理だけど、お孫さんは、八重っちと、俺の分まで、やりたいこと、今からいっぱいできるんじゃないのって……ほらほら、手、止まってるよー」

慌てて、白い石を打つ。

さっき「八重っちと、俺の分まで」とｋｅｎ１は言った。

ただの怪我などで入院している人が、そんな言い方をするだろうか。

たぶん違う。声が明るいから最初、気がつかなかった。飲んだくれて寝床でゲームしているわけじゃない。ゲームで繋がった声の主は、相当深刻な状態なのかもしれない。オセロは操作が易しいから、それで――

「八重っちが、孫はもう、見舞いにも来ないって言うからさ、そっかー、って思ってたけど、俺、八重っちのために、なんかやりたいなって思った。八重っちは、天国宅配便とか、そんなの知らなかったみたいだけど、俺、前に調べたことあってさ。オセロ仲間のよしみだし、もし孫に、伝えたいことがあったら俺が絶対伝えるからって、代理で申し込んだんだ。八重っちの声、録ってるから。じゃ、行きまーす。いい？　ＯＫ？」

――文香――

確かに祖母の声だ。⑥厳格だったあの頃より、ずっと弱々しい。

――もっと文香の話を聞けば良かった――
――やりたいことをやりなさい――
――行きたいところへ行きなさい――

⑦やってみろ――

いつもの祖母の声がする。いつだって、お前なんかにできるものか。やれるものならやってみろと見下され、馬鹿にされてきた。でも今は違う。

――住井の血を、お前の力をみせてやれ――

オセロはもう、負けていた。

何度も礼を言う文香に、ｋｅｎ１は笑って言う。「いいよーいいよー礼なんて。八重っちと対戦できなくなって退屈してたんだ。八重っちのこと伝えられて、俺もすっきりしたー。なんだい、ばあちゃんは超強いのに孫は弱いじゃん。八重っちは、ああ見えてオセロの女王だから。ほら、名前の下の、横のとこ見て。大きい星が百勝だからね」

見れば、八重の名の下は大きい星ふたつに小さい星がたくさん。ｋｅｎ１のところには星はたったの四つだ。

「じゃあな、八重っちの孫ちゃん！　達者で暮らせー」

本当にありがとうございます、と言って、他に何を言おうか、頭の中で考えているうちに、ｋｅｎ１との対戦は終わっていた。

不意に思い出す。小学生の頃、オセロの盤面を出して、縁側で白と黒、一人二役で遊んでいたら、一回だけ、「やってみろ」と祖母が相手をしてくれたことがあった。怒られるのが怖くて、終始ビクビクしており、何かの修行みたいだった。あのとき、祖母には大差を付けて勝ったけれど、怖くて、どう喜んだら良いのかもわからなかった。

今思えば、わざと負けてくれたのだろう。不器用で、孫との遊び方を良く知らなくて、うまく遊べなかったのかもしれない。

今こそ家は祖母と父母、文香の四人だけとなっていたが、昔は曾祖父、曾祖母、祖母と祖父、父を筆頭に五人兄妹がいた。農作業の他に子育て、掃除洗濯などの家事、三食の食事の世話を一手に引き受けて、祖母ひとりで家をまわしていたのだ。曾祖父は身体をずっと悪くしていて、その介護もやっていた。便利になった今とは違って、掃除機や食洗機、洗濯機などもまだなかっただろうし、農作業だってすべて手作業だったろう。一日のうち、自由になる時間なんて、ほとんどなかったに違いない。

オセロだってそんなに強かったのだったら、先を読む力みたいなものも、かなりあったはずだ。地頭も決して悪くはなくて、もしも時代が違ったり、住むところが違ったら、どんな人生が拓けていたかはわからない。

近所の寄り合いにしても、祖母なりに、地域の人と仲良く協力しあうことで、自分だけじゃなくて、家族や地域をも守ろうとしていたのかもしれない。

もしかして、祖母は、入院したことで初めて、自分のための時間を持つことができたのだったら——

⑧なんてことを言ってしまったんだろう、と文香は思う。祖母とまともに交わした最後の会話は、「ばあちゃんなんて、家が大事、家が大事って、この村からも全然出てないくらい、狭っこい人生じゃないか！　世界のことなんか何にもわかんないくせに！」だった。

⑨わかっていなかったのは自分のほうだ。狭っこいのは自分のほうだった。

いつかの授業で習った宣言のように、〝人は生まれながらにして自由かつ権利において平等である〟——とは、限らないかもしれないけど、めまぐるしく変わっていく環境の中で、何が正しいのかも刻々と変わっていく中で、祖母は祖母で、ばあちゃんなりの人生を精一杯生きた。

——やりたいことをやりなさい——

——行きたいところへ行きなさい——

「ばあちゃん……」

文香はつぶやいた。

両親の元へも、天国宅配便から、祖母の音声のデータが届けられたことを知った。ｋｅｎ１が、すべて手配してくれていたらしい。祖母は、最後まで家族に対して、強い姿勢を崩さなかったが、両親への音声では、文香の進学を擁護してくれた。直接は言えずにいたのだろう。頑固な祖母と言えば祖母らしい。

文香は、志望大学の入試にも無事に合格し、この春から、東京で大学生活が始まる。いつでも顔を見て話せるように、実家のネット環境も整えた。

墓をブラシで掃除し、草を引き、古い花も取って、買ってきた新しい花を供える。ろうそくと線香に火をつけて、文香は祖母の眠る墓に、大学の合格を報告した。

大学できちんと勉強して、自分がやれるところまでやってみる。でも、祖母の守ってきたこの家と思いも、大切にしようと心に決めた。今はなんにもできないけれど、農業と英語をうまく組み合わせることで、何か新しいことができるようになるか

もしれない。

150

問一　本文4行目「①遺品」とありますが、具体的にこれは何だったのですか。本文中から九字でぬき出し、そのまま書きなさい。

問二　本文54～55行目「②何の印なのか、大きさの違う星印もいくつか見える」とありますが、この星印は「オセロの□星」を表しています。□に入る漢字一字を書きなさい。

問三　本文59行目「③文香は怒りに震える」とありますが、この「怒り」はどのようなことに対する怒りですか。五十字以内で説明しなさい。

問四　本文65行目「④怖いものなしだな」とありますが、ｋｅｎ１のどんな様子が「怖いものなし」なのですか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　自分が男だからといって、家事を大切に考えている八重を見下しているｋｅｎ１の様子。
イ　令和の時代になったからといって、昭和生まれの八重をばかにするｋｅｎ１の様子。
ウ　声しか聞こえないからといって、厳格な八重に悪口を言うｋｅｎ１の様子。
エ　姿が見えないからといって、遠慮なく八重に言いたいことを言っているｋｅｎ１の様子。

問五　本文74行目「⑤声が小さくなる」とありますが、なぜ「声が小さくなった」のですか。その理由として**適切でない**ものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　家を継ぐ必要がないというｋｅｎ１の説得力ある発言に納得してしまったから。
イ　家を継ぐことが当然であったため、自身の満足感など考えたこともなかったから。
ウ　他の道を選ぶことなど考えることさえなかっただけだと気づいたから。
エ　家を継ぐことが人生の満足感につながると自信をもって答えられなかったから。

問六 本文104行目「⑦やってみろ」とありますが、この「やってみろ」は、本文100行目「⑥厳格だったあの頃」の「やってみろ」とどのような違いがありますか。「⑥の「やってみろ」は、～だが、それに対し⑦の「やってみろ」は、～。」という形で説明しなさい。

問七 本文130行目「⑧なんてこと」が指し示す内容を本文中から八字以内でぬき出し、そのまま書きなさい。

問八 本文133行目「⑨わかっていなかったのは自分のほうだ。狭っこいのは自分のほうだった」とありますが、文香はなぜそのように思ったのですか。その理由として適切なものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 激動の時代を生きてきた祖母に対して、文香は平和で自由、平等な世の中のことしか知らなかったから。
イ 祖母がどのように生きてきたかを考えもせず、村から出ていないという一面のみで祖母を非難してしまったから。
ウ 家や地域を大切に守ってきた祖母と同じように、文香自身も今後家を継ぎ、この家から出ないことにしたから。
エ 入院して自分の時間を持つことができた祖母よりも、家と学校の往復しかしていない文香の世界の方が狭いから。

問九 この文章の表現や内容について述べたものとして、適切なものを次の**ア**～**カ**から**すべて選び**、その記号を書きなさい。

ア チャラチャラしたイメージだったｋｅｎ１が重い病に冒されていることが判明し、重苦しい印象で結末を迎えている。
イ ｋｅｎ１の軽妙な語り口が、八重の死と生き方という繊細な内容を、単純に感じさせる効果がある。
ウ 話の前半で文香が疑問に感じたことが、後半になって次々と明かされていく展開に面白さがある。
エ 見知らぬ男性とオンラインで戦っているオセロの戦況が、祖母の考えの変化と一致している。
オ ｋｅｎ１が祖母の本心を引き出したことで、文香自身も祖母の考えを大切にしつつ自分の将来について考えを深められた。
カ 祖母の厳格さを嫌悪する文香と家を継がせたい祖母の気持ちを、ｋｅｎ１の視点から客観的に描いている。